—これだけは神ですら止められない—

〈いつ〉1981年5月15日(金)15時36分5秒 〈どこで〉東京 微風・快晴・気温23度 瞬間人口1400万人 〈どのくらい〉マグニチュード7.9直下型震度7-激震

地震列島

特別スタッフ
竹内均
大崎順彦
諏訪彰

製作■田中友幸
脚本■新藤兼人
監督■大森健次郎
特技監督■中野昭慶

東宝

勝野洋
永島敏行
多岐川裕美
松尾嘉代
松原千明
佐藤慶
松村達雄
村瀬幸子
岡田英次
三木のり平
山崎努
大滝秀治
佐分利信

パナビジョン
4Ch マグニサウンド

191258-215

東京音協9月例会 ￥1000

(一般1400円の処 音協会員に限り)

千代田劇場 (591) 1716	上野東宝 (831) 3431	新宿東宝ビレッジ1 (351) 3128	江東劇場 (631) 3121
渋谷宝塚 (461) 8779	新宿コマ東宝 (202) 0131	テアトル池袋 (983) 4258	浅草東宝 (844) 3141

地震列島

脚本■新藤兼人　監督■大森健次郎　特技監督■中野昭慶

〈スタッフ〉
製作……田中友幸
製作補……高井英幸
脚本……新藤兼人
監督……大森健次郎
特技監督……中野昭慶
撮影……西垣六郎
美術……阿久根巌
音楽……津島利章
録音……林鐘四郎
照明……小島真二
〈特別スタッフ〉
竹内均（東大教授）
大崎順彦（東大教授）
諏訪彰（前気象庁・地震観測所長）
〈キャスト〉
川津陽一……勝野洋
妻裕子……松尾嘉代
橋詰雅之……永島敏行
芦田富子……多岐川裕美
丸茂教授……大滝秀治
内閣総理大臣……佐分利信
梅島一枝……松原千明
川津房江……村瀬幸子
芦田浩蔵……松村達雄
官房長官……佐藤慶
気象庁長官……山崎努（特別出演）
渡辺教授……岡田英次
助川象三……三木のり平
主題歌■「アメンジストサンレイ」
コロムビアレコード
唄・しばたはつみ
サントラ盤■テイチクレコード
製作■株式会社　東宝映画
配給■東宝株式会社

●かいせつ

絶えず日本列島のどこかを狙っている地震について私達は無関心ではいられない。いつ……どこで……どのくらい……。際限なく膨張した巨大都市。もし明日にでも大地震が発生したら一体どうなるのか。映画「地震列島」は、突如東京を襲った恐怖の地震パニックを背景に、この未曾有の大災害に敢然と挑んだ人々の愛と闘いを描いた超大作である。

地震を単に打つ手のない天災だとあきらめて、無防備にその被害を受ける時代は終わった。人間の愛と勇気と英知によってその被害を最少限にくいとめることが出来る。この作品は、日本列島＝地震列島住民に、改めて地震をみつめ直すべきだと警鐘を鳴らすものとなるだろう。

脚本・新藤兼人。監督・大森健次郎。特技監督は「日本沈没」の中野昭慶。学術アドバイザーとして、「日本沈没」に引き続き竹内均（東大教授）、大崎順彦（東大教授）、諏訪彰（前気象庁地震観測所長）の三氏が参画。

（カラー・パナビジョン）

●ものがたり

過密の度をこえた東京。50年の間、マグニチュード5以上の地震を体験していない。乱立する高層ビル、はりめぐらされる地下鉄網、高速道路、新幹線。地震国〝日本〟を忘れているかのように、それらはただ無防備に――。

「近い将来、この都会のざわめきが断末魔の絶叫にかわる日がくるのではないか――」

地震学者・川津陽一はデーターを手に顔を曇らせた。それは地殻の変動と異常なまでの地盤の傾斜を示している。加えて三原山火口の溶岩の異常な盛り上がり。

東海地域地震予知の月例会。陽一は観測データーの異常性を訴えた。東京を直ちに危険地域に指定し、徹底的に防災対策に取り組むべきだと主張するが、防災対策は政府の仕事で学者の職域ではないと学界は陽一に取り合わない。業をにやした陽一は「三十日以内に直下型地震が東京を襲う」と暴言に近い言葉まで吐き、学界を敵にまわしてしまう。地震の権威者、故川津宗近の娘裕子と結婚した陽一であったが、その妻との間はすでに冷えきっていた。陽一の心を癒してくれるのは、川津地震研究所々員の芦田富子だけであった。富子も陽一を愛していた。が、富子の父の入院費等、陽一との間の金銭関係があるので彼女は二人の関係に蟠りを感じていた。

一方、各地の異常な自然現象を取材しているルポライター橋詰雅之、カメラマン梅島一枝がいた。キジの声、ナマズなど。雅之は富子と同郷で富子を愛していた。また、一枝は秘かに雅之に想いを寄せていた。

燃えない車の開発、非常時のため団地地下に大プールを建設、トンネル内での火災避難実験など、陽一の防災に注ぐ行動は一段とエスカレートしてきた。そんな彼にひかれた雅之は、富子のことでは少し蟠りながらも陽一を徹底的に取材しキャンペーンをした。

懇親ゴルフ会「猪の会」。財界、政界の顔ぶれが首相と談笑する中に、突然陽一はわりこんで東京が世界一の無防備都市であると訴えた。その無謀な言動のため予知会の丸茂会長との対立はさらに激化したが、後日、直接首相と話す機会を持つことになった。「今、関東大震災クラスのものが来れば、百三十兆円の被害になる」と力説する陽一だったが、首相の返答は非常に官僚的で彼は失望した。

研究所は閉鎖された。その矢先、傾斜計の異常が発覚し緊急予知会が召集された。やっと学界が腰をあげたのだ。しかし、すでに遅かった。マグニチュード7.9、震度7の大地震は、もうそこまで来ていたのだ。

それは陽一が妻裕子と別れ、富子と結婚するために最後の話し合いをする日だった。渋谷「松之家」へ向かう陽一と裕子は地下鉄の中に。富子はマンションに、思いとどまらせようとする雅之は富子の部屋へ向かうエレベーターの中に。運命の瞬間が遂に来た。震動と破壊、血と死と叫び。かつてなかった大惨事に地獄と化した東京が燃えあがる――。